

ふる里めぐり

ふる里石内の史跡・遺跡

石道村 と・その周辺の 史跡・遺跡

古文書などから見た、史・遺故辰野誠次先生の
遺品（郷土史）を元に資料整理した 古文書など
に挿絵を加えて小冊子で保存と発刊。（非売品）



シダレン



水晶くん

※一般募集した「石内のゆる～いきやら」募集の中から人気投票
の結果、優秀 6 作品の中から・シダレン・水晶くんの登場です。

石内公民館活動

石内の歴史探求講座

石内をもっと知ろう会

企画・編集

平成 29 年 3 月

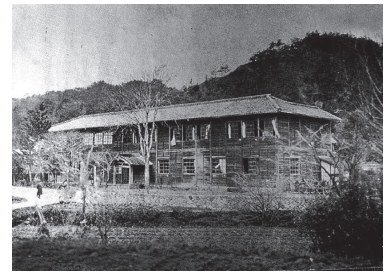
広島市佐伯区五日市町石内 6902-4 窪田君男

石内村の歴代村長

初代	土井 雅雄	明治22年6月 就任	明治26年5月 退任
二代	野上 貫吾	明治26年5月 就任	明治43年6月 退任
三代	谷口 穰	明治43年6月 就任	明治43年7月 退任
四代	紙野 和市	明治43年8月 就任	大正14年8月 退任
五代	沖村 一郎	大正14年9月 就任	昭和04年9月 退任
六代	丑田 茂	昭和05年1月 就任	昭和21年4月 退任
七代	吉田 雅登	昭和21年10月 就任	昭和22年9月 退任
八代	八木新太郎	昭和22年9月 就任	昭和24年7月 退任
九代	仲田 繁	昭和24年9月 就任	昭和30年3月 退任

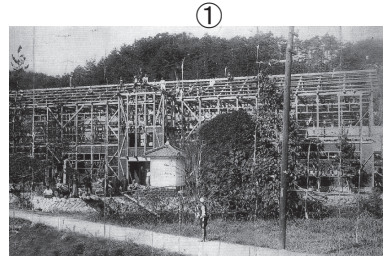
①

昭和2年まで使用の木造2階校舎と平屋木造の便所棟。



②

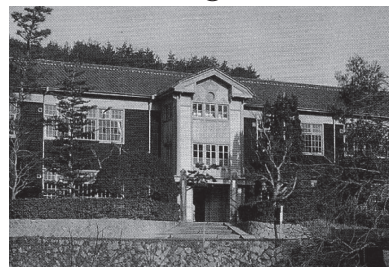
従来の2階建て校舎は杉丸太で突っ張りをする程老朽化。昭和2年から2年後2階校舎2棟と平屋講堂と運動場拡張。全面的道路幅は人から推測3～4m



②

③

昭和46年鉄筋コンクリートの校舎に建替わるまで戦前・戦後の学舎。被爆建物。



③

【はじめに】

平成23年4月に発足した「石内をもっと知ろう会」は、次の活動方針を掲げ地道に活動、会員の理解と努力で今日まで継続して参りました石内公民館の「石内の歴史探究講座」活動グループです。

歴史のある石内と周辺の関係者ら仲間が集まり、石内の歴史・伝統文化・文化財などに関することを、地区内外の歴史研究活動家の話を聞き、話し合う会を開催し、その豊富な知識を記録、後世に伝えることを主目的に、お互いの理解を深め助け合い、楽しい仲間づくりに務めることを目的に定例会を行なう。必要に応じて現地に出向いて、目で見て確認しながら楽しい気楽な会を目指している会です。（平成23年4月第1回講座から抜粋）その活動の中で地区内外の人から貴重な「話」を聞くこともできました。大きな成果を上げております。

年度末を迎え新年度に入るのにあたり、以前、故・辰野誠次先生のご子息様から「石内の郷土史」を伝承するうえで必要な数多くの資料を石内公民館と「石内をもっと知ろう会」に寄贈していただきました。私たち会員の手で資料の整理作業を行い、現在は石内公民館2階の公開展示室に収納・その一部を一般公開しております。

これらの資料から何らかの方法で成果資料が出来ないかと、別掲7名の有志が集まり利用の目的と対象について検討をしました。話し合いの中で、地域の小学生の郷土を愛する(ふる里)・友達や仲間づくり(絆)について学ぶ資料提供に結びつけられないかという意見が出て、「内容は郷土史全般」・「簡単で分かり易い」・「小学校・中高校生」更に新成人を対象にした小冊子作成を目指すことを決めました。

近年、郷土歴史愛好家が各地で増加しています。できるだけ多くの人達が親しみ易い資料を仕上げることに心懸け、この資料が今後、石内の人達に広く活用されれば幸いです。

残されている郷土資料を目にして、故人である仲田繁・石田秋三・辰野誠次の3氏が石内を愛し、その姿を後世に伝え残すために行ってこられた活動と思い感謝を忘れることはできません。

平成 29 年 3 月 31 日

初代会長 小田昭三

石内をもっと知ろう会

会長 西本忠良

※ 郷土史研究員グループ

奥田泰将(石内公民館長)・木村照男(元石内小学校長)・西本忠良(石内をもっと知ろう会長)

石内をもっと知ろう会々員・小田昭三(元会長)・田中孝雄・奥田耕司・窪田君男 【順不同】

目次

○ はじめに	1 頁	○ ◆◆石内の古木・大樹◆◆	20 頁
○ 目次	2 頁	○ ◆◆石内小学校の沿革◆◆	21 頁
○ 石内のあけぼの	3 頁	○ ◆◆水晶が城跡◆◆	22 頁
○ 石内の小字名地図	5 頁	○ ◆◆石内公民館だより◆◆ の中より	25 頁
○ 石内の史跡と文化財	6 頁	○ 編集後記	26 頁
○ 石内村のイネ作り・亀山の石仏・百石	8 頁		
○ かげともの道	9 頁		
○ 貝塚・浄安寺薬師・新宮神社・木船神社	10 頁		
○ 臼山八幡神社	11 頁		
○ 石内の山城跡	12 頁		
○ ◆◆石内の神社仏閣◆◆	13 頁		

◆◆ 石内のあけぼの ◆◆

我々に生活の恵みを与え、文化を育んでくれた石内谷は、太古から今の姿に近い平坦地であつたわけではなく、石内川の形成に伴つて長年の間にできたものである。石内川は現在の瀬戸内海が断層による陥没でできた造瀬戸内海運動(今から約三〇〇万年～一五〇万年前)に伴つて形成されたと言われている。瀬戸内海の地域が陥没する以前、この地方は今より六〇〇～七〇〇mも高い平坦な順平原であつたと言われ、その続きは今も広島県の中央部(世羅大地)から岡山県中央部(吉備台地)にかけて見られ、五日市町付近では石内の向山(六六六m)、河内の窓山(七一三m)、廿日市町(現廿日市市)の極楽寺山(六六一m)、野貝原(のうが高原、七七三m)の頂上が順平原の名残である。それは極楽寺山頂や野貝原が広い平坦地であることからわかる。更に極楽寺山頂には山県郡あたりから運ばれたと言われる古生層の石で、何れも川底の礫のように角が取れ、丸味を帯びた石の層が見られる。これは当時ここに大きな川があつたことを示すものと言われる(廿日市市指定天然記念物)。

瀬戸内海が陥没ででき始めると、海岸線に近い五日市町の背後の向山・窓山・極楽寺山等の上に降つた雨水は、落差により急激に降下し、石内川や八幡川を生じた。そうして、それらの河川は順平原の斜面を侵食し、深い谷や平野を造つた。これが石内谷や五日市平野の始まりである。

瀬戸内海の陥没で、向山・窓山・極楽寺山などの南面の海側は一五〇万年前頃までに標高二〇〇～四〇〇mまで侵食されたと言われている。現在の鈴が峰(三二二m)、京良木山(三四〇m)釈迦が岳(四一三m)石内の和田や有井の東に連なる狐が城跡(二二六m)の山並、西側では

向山の麓の野登呂神原間の丘陵地(二〇〇～二五〇m)、更にこの丘陵地から石内谷に向かつて延びる数列の山並、即ち野登呂と笹利谷間(二〇〇m)、笹利谷と鍛冶計谷間の高城跡(二九四m)鍛冶計谷と半坂間の西が城跡(三一〇m)などの山並が当時の侵食面とされている。なお当時は 石内谷の東西の山並が現在のように原田あたりで侵食切開されておらず、二〇〇m以上の高さで連なり、石内川の行く手をふさいでいたと言う。これら二〇〇～四〇〇m級の山並は高位瀬戸内面とよばれる。

その後石内谷の東側の高位瀬戸内面上に、山田盆地が侵食ででき、ここを源とする山田川が京良木山、釈迦が岳などの水を集め、現在の原田・半坂を北進し、沼田町大塚に入り、太田川水系の安川になつていたと言われる。しかし今から一〇〇万年前頃には、石内川は侵食が進み、石内谷の東西の山並を原田付近で切断して山田川に達し、これを奪つて石内川水系にしたと言われる。これが河川争奪と呼ばれる。

西側の向山の麓の高位瀬戸内面の丘陵地の川は、初め野登呂から神原に向かつて北流し、神原の栗木峠付近から現在の沼田町奥畑―芦谷・猿峠―椎原―幸神さいのかみと北進し、太田川水系の吉山川に流入したが、後にこの川も神原とその西の深谷で鍛冶計川に、更にその西で笹利川に奪われ、共に現在の如く、石内川水系となつたと言われる。この石内川の河川争奪の頃、石内谷の東西の高位瀬戸内面山並の山麓に石内川の侵食による標高一五〇m以下の平坦面が形成された。これを定位瀬戸内面とよぶ。これらの多くは現在小丘陵として残っている。上沖の新宮山(四六m)、長尾城跡(八八m)、下中の有井城跡(五三三m)の住宅地となつている丘陵地、平岩の今市城跡(八八m)、釈迦が岳の北西の山麓の丘陵地である。これらは後に、

古代人の住居地、中世の山城、現在では山畑、五月が丘の如き団地などになっている。石内では弥生時代（今から二三〇〇〜一七〇〇年前）や、それに続く古墳時代の遺跡が、かなり沢山発見されている。これら遺跡には古代人の住居跡や家の柱穴、土器、貝塚などが見られた。

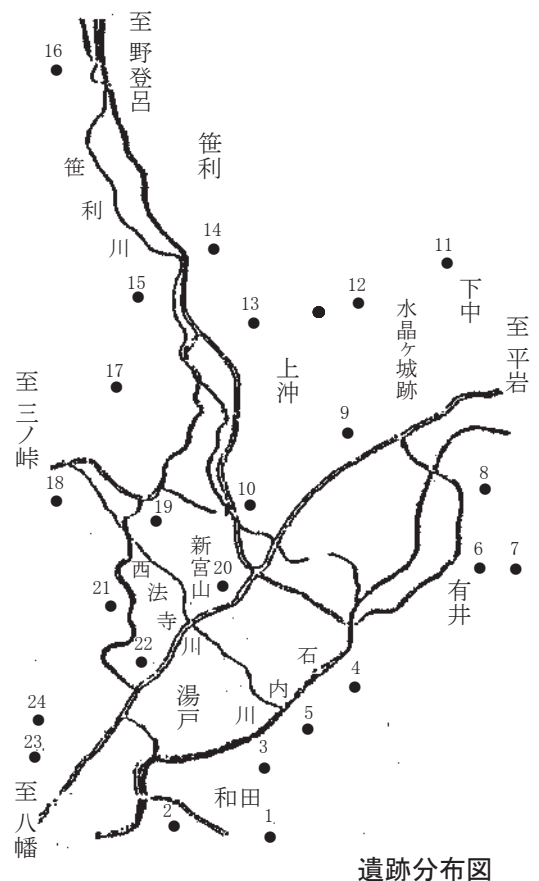
弥生時代、日本にイネが大陸から伝わり、イネ作が始まった。それで人々は平地に水田を造り、近くの丘陵などに居住した。石内ではこの時代、左表や図に示すように、新宮山を中心に、周辺の和田、有井、下中、下沖、上沖、笹利、湯戸など、現在の石内の南岸の石内川、笹利川、西法寺川沿いにイネ作りがなされたようである。なお、その時期は、遺跡から出土した弥生式土器の特徴から弥生時代の終わりとされている。続く古墳時代では、上沖古墳、湯戸古墳などがある。古墳時代の遺跡からは土師器、須恵器など、この時代独特の土器が出土している。

【石内公民館だより 連載・ふるさとめぐり】

石内のあけぼの 辰野誠次・文 原文のまま転載

石内の古代遺跡

番号	名 称	出 土 物
1	上和田貝塚	弥生式土器
2	新九畑（和田）包含地	弥生式土器
3	岡田Ⅰ（湯戸）包含地	弥生式土器
4	岡田Ⅱ（湯戸）散布地	弥生式土器
5	平原（湯戸）単独出土地	弥生式土器
6	有井貝塚	
7	観音（有井）包含地	弥生式土器
8	平田（有井）包含地	弥生式土器
9	晶石城（下中）単独出土地	弥生式土器
10	迫口（下沖）包含地	弥生式土器
11	水晶ヶ城Ⅰ遺跡	弥生式土器
12	水晶ヶ城Ⅱ遺跡	弥生式土器・館玉・住居跡
13	浄安寺遺跡	弥生式土器・まが玉（まがたま） 鉄やじり・住居跡
14	白畑（上沖）貝塚	弥生式土器
15	寺山（上沖）包含地	弥生式土器・土師器
16	笹利迫田貝塚	弥生式土器・住居跡
17	長尾城遺跡	弥生式土器・土師器・住居跡
18	一の谷（上沖）貝塚	弥生式土器
19	上沖古墳	横穴式石室・土師・須恵器
20	新宮山遺跡	弥生式土器
22	百石（湯戸）散布地	弥生式土器・須恵器
23	湯戸古墳	横穴式古墳
24	浄徳寺（湯戸）包含地	土師・須恵器

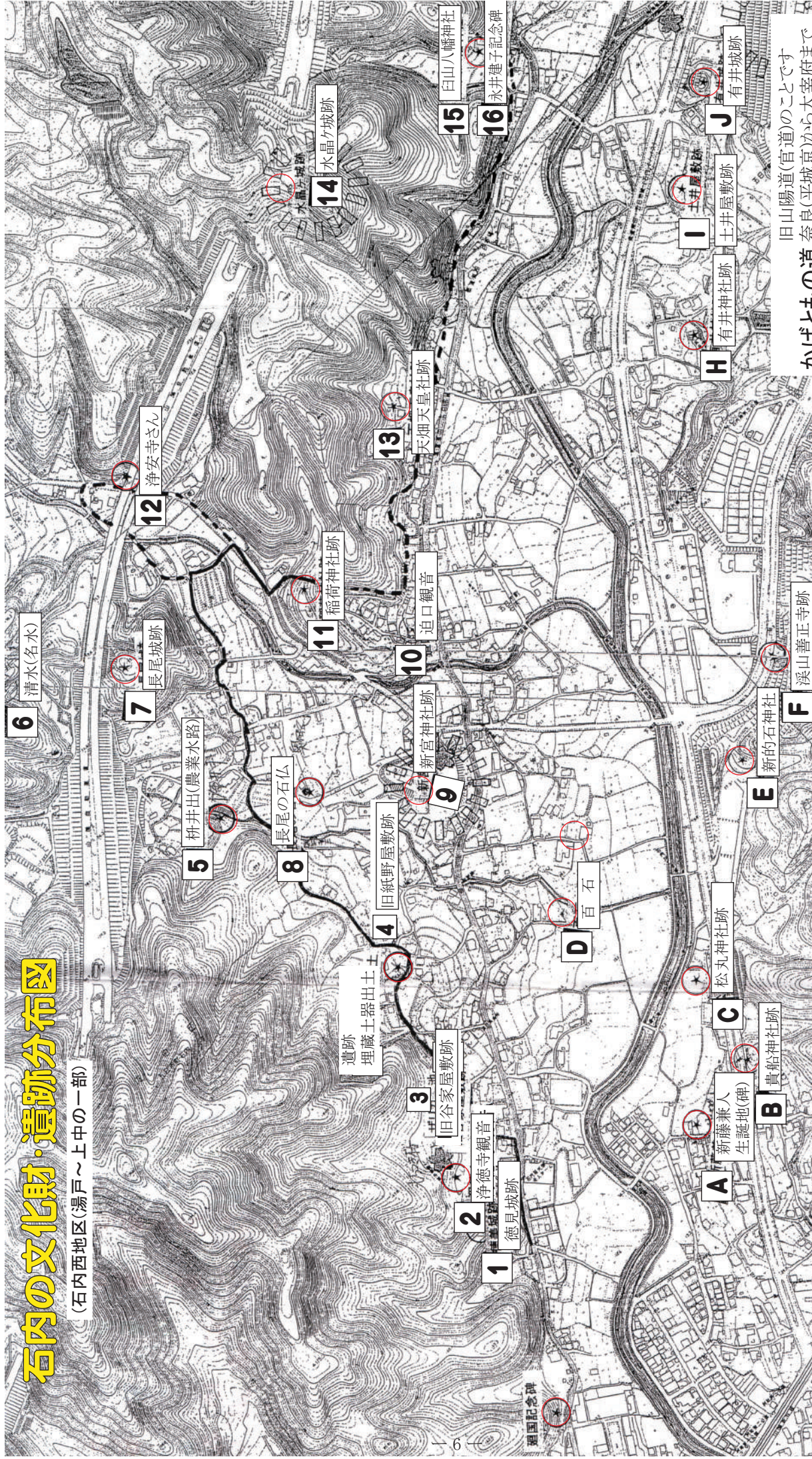


石内の小字図



石内の文化財・遺跡分布図

(石内西部地区(湯戸～上中の一部))



旧山陽道(官道)のことです
奈良(平城京)から大宰府まで
が石内を縦断していたのです。

かげともの道

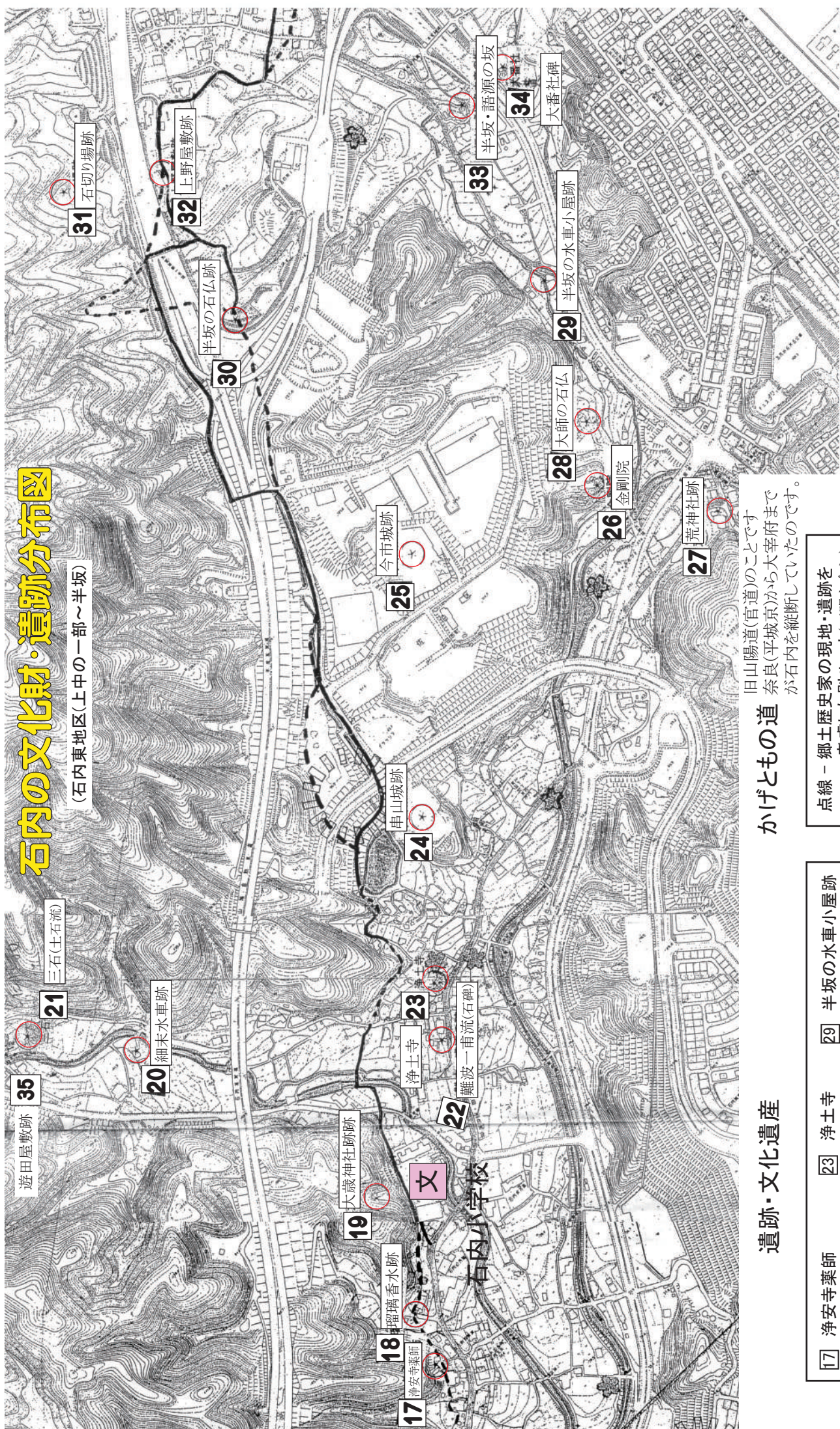
点線 - 郷土歴史家の現地・遺跡を
考慮した別ルート(不明を含む)
実線 - 県道沿いの北側山裾を東西に
通る想定されるルート

遺跡・文化遺産

- | | | | | |
|-------------|----------|------------|--------------|----------|
| 1 徳見城跡 | 6 清水(名水) | 11 稲荷神社跡 | A 新藤兼人生誕地(碑) | F 溪山善正寺跡 |
| 2 浄徳寺観音 | 7 長尾城跡 | 12 浄安寺さん | B 貴船神社跡 | G 滝の観音 |
| 3 旧谷家屋敷跡 | 8 長尾の石仏 | 13 天畑天皇社跡 | C 松丸神社跡 | H 有井神社跡 |
| 4 旧紙野屋敷跡 | 9 新宮神社跡 | 14 水晶ヶ城跡 | D 百石 | I 土井屋敷跡 |
| 5 柳井出(農業水路) | 10 追口観音 | 15 白山八幡神社 | E 新宮神社跡 | J 有井城跡 |
| | | 16 永井建子記念碑 | | |

石内の文化財・遺跡分布図

(石内東地区(上中の一部～半坂)



かげとも の 道
 旧山陽道(官道)のことです
 奈良(平城京)から大宰府まで
 が石内を縦断していたのです。

点線 - 郷土歴史家の現地・遺跡を
 考慮した別ルート(不明を含む)
 実線 - 県道沿いの北側山裾を東西に
 通る想定されるルート

遺跡・文化遺産

17	浄安寺薬師	23	浄土寺	29	半坂の水車小屋跡
18	瑠璃香水跡	24	串山城跡	30	半坂の石仏跡
19	大歳神社跡	25	今市城跡	31	石切り場跡
20	細末水車跡	26	金剛院	32	上野屋敷跡
21	三石(土石流)	27	荒神社跡	33	半坂・語源の坂
22	難波一甫流(石碑)	28	大師の石仏	34	大番社碑

●【石道村】

石内は、古くは石道村と呼ばれていた。亀山（新宮山）を中心に二、三世紀ころ始まったイネ作は、五〇〇年後の八世紀ころには、今の半坂あたりまで及んだと考えられる。そのころ延暦年間（七八二～八〇五）に石道村はできた。この村は、その後徳川時代の初めの寛文元年（一六六一）に石内村と改称されるまで約八五〇年間続いた。同じ延暦二年（七八三）に臼山八幡神社が祭られたと伝えられる。これは豊前国（大分県）宇佐八幡から、みたまを分けもらった仲哀天皇、応神天皇、神功皇后の三神が祭られている。このように、今から一二〇〇年前ころには、石道村の輪郭が整ってきたようである。

●【イネ作りの始め】

イネが大陸から日本に伝わったのは、弥生時代（二三〇〇～一七〇〇年前）の初めころと言われている。イネ作りが始まると、人びとは水田を開きその近くに定住した。その跡から、当時彼らが使った弥生式土器の瓶の破片などが今でも見つかる。

石内で今までに出た土器では弥生時代の終わり頃の形のが最も古い。それは亀山（新宮山）を中心に、和田、有井、下沖、上沖、湯戸にみられた。このことは、石内で、少なくとも今から一八〇〇年くらい前から、亀山を中心にして、その周辺に人が住みつきイネ作りを始めていたことを物語っているものと言えよう。

●【亀山と石仏】

新宮山は以前、亀山と呼ばれていた。昔この山は後方の西法寺山と丘続きでその形が亀に似ていたのであろう。この付近の集落の権力者の古墳が亀山や後ろの丘陵の南側に幾つも作られたらしい。これらの大部分は後に丘陵が取り去られた際、破壊され、今は僅か一基が田の縁に残っている。これが上沖古墳と呼ばれる石組みの横穴式石室で、土地の人は石仏と言っている。

古墳は四、七世紀に作られた。当時の土器は以前よりは精巧な土師履器、供献用の須恵器で、その破片が今も亀山や付近の田畑から沢山出る。古墳時代の土器は湯戸の浄徳寺観音付近にも出土する。その山麓には、横穴式の湯戸古墳がある。

●【百石】

湯戸に今、百石と言う小字がある。昔石内村から浅野藩に出した古文書に「往古当村の郷中よりしもは入江で潮満込み、これに注ぐ川幅広く、渡るに数百の飛び石あり。為に怪我人等出で石仏を建つ。この石仏は今もあり、このあたりの地名を百石と呼ぶ」とある。

現在バス停湯戸と下湯戸との間の県道の両側の丘あたりが小字百石である。数千年前の瀬戸内海の水位が、今より数mも高かった証拠が近時知られてきたので、当時湯戸辺りまで海であつても不思議ではない。入江の海岸や石内川・笹利川、西法寺川（三の峠を水源）は恐らく自然のまままで川幅広く、湯戸から和田に渡るのに飛び石が必要だったのであろう。

◆ ◆ かげともの道 ◆ ◆

● 【かげともの道】

古い昔の山陽道は「かげともの道」と呼ばれ、われわれの石道村を通っていた。これは大化の改新（六四五）後奈良の朝廷と、その出先機関である九州の大宰府を結ぶ官道であった。この古山陽道は瀬野から、当時安芸の国のあつた府中を通り、矢賀、牛田、長束を経て太田川を渡り、伴から石道に入り、大町（八幡の郡）^{（おのち）}から三宅、平良、大野、小方と通じた。

そのころの国の諸制度を書いた延喜式（九二七）に、この道にあった駅名がのっている。それは伴部（伴）、大町（郡）、種篋^{（へら）}（平良）、濃喉^{（の）}（大野）、遠賀^{（おが）}（小方）などで、駅には役所があり、常に馬などが配備されていたと言ふ。

石内村では、「かげともの道」と呼ばれていた古山陽道が、半坂から湯戸まで、ほぼ今の県道と並行して、その少し西側の山裾にそって通っていた。その古道の大部分は、今でも、かなりよく残っている。私たちは、これを日常農道などに使用している。

今その古道をたどってみると、古道が大塚から半坂に入った点は、やはり今の県道と同じだが、そこから今の荒蒔団地を西行し、堂上宅・空宅の側を通って南行し、平岩の扇迫に向かう。このあたりは今も松林の中で、古い「かげともの道」のすがたを残しているのではないだろうか。半坂と扇迫との堺の峠の頂上には、古びた石仏もある。

平岩の扇迫に入った「かげともの道」は、現在の道より少し東寄

※（財）広島市未来都市創造財団
平成 年（二〇一二）石内・八幡東・八幡・観音・坪井公民館共同で「古代山陽道・影面の道」の全 頁の小冊子 発行

りの山裾を南行し、今、石槌神社のある小丘に登り境内を通り、渡辺宅と旧塩崎宅との間の竹林、政田宅裏の雑木林の中を下り小畑宅前、石内小学校裏山裾を通って、公民館前で県道に合する。これより古道は旧下中集会所下まで、ほぼ県道に含まれ、その頃に祭られた浄安寺薬師、八幡神社前を通る。下中集会所から古道は県道から少し離れ、森崎、国政宅等の裏を山沿いに進み、中山宅から南に現存する小道を通って旧山根宅下で、また県道に出る。なお、その山側に、その頃（八九〇年頃）の宇田天皇を祭ったと言ふ天皇社があつた。

「かげともの道」は、下沖の竹内宅下で現県道から西に分かれ、上梶宅前を経て迫口観音下の山裾を回り、上沖の谷を笹利に近い森京宅まで入る。そこで笹利川に沿って南に曲がり川を渡り、後ろの長尾城の山裾を南行して、奥田宅横から湯戸に向かった。

湯戸の入り口で西法寺川を渡り、今に小道として残っている平崎宅前、岡本宅裏を南行する。但し、本田宅裏に至って現在の小道より数m東寄りを家裏に接して、廣田要、中谷、谷口宅内を経て旧村堺の小山に達し、左折して現県道に入って利松に向かった。

この様に石内村には、古く国の重要な官道が通り、その後の村の歴史に様々な影響を及ぼしている。

●【貝塚】

石内では新宮山の周り1km以内に五ヶ所貝塚が知られている。貝塚は古代人の捨てた貝殻の堆積で、その中の土器の破片から、そこに何時頃人が住んでいたか等を知ることができる。和田の貴船神社跡の後ろに上和田貝塚という石内で最も大きな貝塚がある。大正一五年（一九二六）広島二中の吉野盆見先生が発見、考古学雑誌で日本の学界に発表されている。その他、最近見つかった有井貝塚は旧海部宅へ登る道、白畑貝塚は上沖佐々木宅裏、片山貝塚は湯戸佐藤宅の裏で、何れも弥生後期（一八〇〇年前）の土器を含むので、おそらく石内には、その頃人が住みつき始めたものであろう。

●【浄安寺薬師】

上中の旧石内公民館の裏に薬師堂がある。これは萬正山門前院浄安寺で、本尊は薬師如来の座像である。高さが八四・五cm、座布が六八cmの木像である。昭和十三年、仏像の体内から宝暦（二二四年前）の修理の際、入れられた木札が出た。それには薬師像が天平の昔（約一二六〇年前）行基菩薩の手で作られたと記されている。

しかし栗田元次氏（旧広島文理大教授）は平安末期（約八〇〇年前）、小倉豊文氏（広島大学名誉教授・広島県文化財保護委員）はもっと古い藤原時代（約一〇〇〇年前）の作としている。何れにしても古い貴重な文化財が我々の近くに保存してあるわけである。

沖組の亀山（新宮山）には、明治四一年（一九〇八）臼山八幡神社に合わせ祭られる迄は石内村の村社の一つであった。新宮神社の由来は不詳だが、石内では一六〇〇年前の弥生時代に、この亀山を中心にイネ作りが始まったと推定され、その頃からの祭り用土器も出ていて、亀山には古くから我々の祖先の信仰の中心があつたに違いない。新宮神社の祭り神は伊弉諾尊・伊弉冊尊いざなぎのみこと いざなみのみことで、境内は三四七坪（一一四五㎡）、本殿・幣殿・拝殿があつた。古く石内村の中程から南は、中・沖・笹利・に分かれ、新宮神社は沖（今の下沖・上沖・湯戸）と笹利組一四五戸の氏神で、九月二十九日が祭り日である。

●【貴船神社】

和田の穴ヶ迫には、もと石内村の村社貴船神社があつた。それは和田部落の北の石内川に近い小丘上で、跡地には、いま町内放送の拡声器がある。今の和田は、旧口和田村の一部で、上和田と呼ばれ、明治の初期に石内村に編入された。貴船神社は明治四一年（一九〇八）臼山八幡神社に合わせ祭られるまで上和田の氏神社であつた。境内は七二坪（二八三㎡）、本殿・幣殿・拝殿があつた。祭り神は閻霰神くわんげんのかみで谷水のかみである。貴船神社は太古ここに貴人が船で着き祭つたと伝わるが、これは古くこの辺りまで海で、流着した権力者と一族が水の神を祭り、イネ作りを始めたことを物語るのではあるまいか。

●【白山八幡神社】

白山八幡神社は今から一二〇〇年前石道村ができた頃、延暦二年（七八三）豊前国（大分県）の宇佐八幡の祭り神、仲哀・応神天皇・神功皇后のみたまを分けもらって祭ったものと伝えられる。初めは小社であったが、村民の尊敬と祭り神が武神であるため、その後石道村に起こった兵乱の際の将兵の信仰に依り、次第に立派になっていった。

四〇〇年後、寿永四年（一一八四）の源平合戦の時、源範頼軍が陸路壇ノ浦に「かげともの道」を下った際、源氏方の佐々木左衛門国正が水晶ヶ城に據って、いま平岩部落に残る今市城・串山城の平家方と闘った時、この八幡神社を信仰し、靈験があったと伝えられている。

戦国時代、周防の大内氏と銀山城（広島市安古市町）の武田氏が争った頃、大内方の麻生右衛門が天文一〇年（一五四一）水晶ヶ城の城主になり、白山八幡を信仰して、朝夕礼拝し、開運したので、社殿を造営し寄進したと言われている。

白山神社と言う社名は、社の後ろにある白山に由っている。

この白山は水晶ヶ城の東翼の城の一部として構築され、その山頂が、今でも石内農協支所の前あたりから、よく見えるように、上下二段に削られ白の形になっている。従って白山神社の社名は水晶ヶ城が石道本城として近郷稀な大きな山城として完成された戦国時代以後のものと思われる。

天文二二年（一五五三）毛利元就と陶晴賢の厳島合戦に際し、倉重・河内・石道村に陣を張った陶軍に向かって、石道村に入っ

た毛利軍は、先ず白山神社に戦勝を祈願して、御興、幕、釣燈等を寄進した。その後、元就の孫の輝元も当八幡を信仰し、天文九年（一五八一）、文禄二年（一五九三）と二度にわたり社領を寄付したと言う。

徳川時代になってからは、文政年間（一八一八～一八三〇）石内村の領主だった浅野孫左衛門が長柄・馬具・鉢燈・また社殿の修理に材木等の寄進をした。社殿の再建は寛文三年（一六六三）庄屋白井清右衛門、文化二年（一八二四）庄屋五作、七郎右衛門に依る記録が棟札等に残っている。

明治四一年（一九〇八）五月二日それまで石内村内の各地にあった神社が白山八幡に合わせ祭られた。白山八幡と、沖組の丸山にあった新宮神社、和田の穴ヶ迫の貴船神社、湯戸の平原の松丸神社の四つの村社と、白山神社の摂社であった有井神社の祭神は、いま白山神社の正殿に祭られている。村内各地にあった他の二九社の祭神は、正殿が狭いため、その西側に別に建てられた相殿に、それぞれ神体を区分して安置されている。昭和一五年（一九四〇）には、いわゆる紀元二六〇〇年の記念事業として境内が拡張され、本殿・舞殿・の移転、幣殿の改築などがなされ、現在みられる荘厳な氏神社となった。

◆ 石内の山城跡 ◆

● 【高城跡】

水晶ヶ城から水路跡の道を 1km 行き、左（北）折して坂道を約 1・3km 登ると高城跡がある。ここは下講・

中講の谷と笹利谷との間の尾根の中の最高地点で、今そこには

高圧線の高い鉄塔が立ち、湯戸方面からよくわかる。高城の本丸は平坦で約 100m²、今標高二九四・八mの三角点の標識の杭がある。

本丸の西と南面は急傾斜、東と北面は、段落ちで、その下は平坦である。高城は何時頃の城か、城主のきろくも無い。

併し、この城の北の高山に「源氏大休の段」と言う遺跡があり、

これと水晶ヶ城を結ぶ道の中に高城はある。また高城から中講に下った狼迫に源範頼を祭った範頼神社もあったので、

源氏と関係のあった城ではあるまいか。

● 【今市・串山城跡】

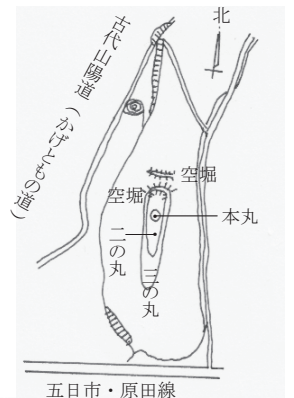
バス停上「平岩」の北、扇迫の谷から流れ出る小川を挟んで、

東に串山、西に今市城跡がある。両城は今から約八〇〇年前の源平時代、当時厳島神社の神領で平家の勢力の強かった佐西郡

（現・佐伯郡）の東端の守りとして、古山陽道（かげともの道）の通路の扇迫谷と、その頃開通した半坂原田・平岩道の間に造られた平家の城であった。これに対し源氏方は、約 1・5km 西の水晶

ヶ城によって、両城の平家方と戦ったと伝えられている。

今市・串山両城のうち、西にある今市城の方が、山は低いけれども本城で、いろいろな郭（しろの構築）が整い、それらが今もかなり保存されていて、古城の姿を知るによい城跡である。



今市場 略図



今市城は東と西側が断崖で小川に臨み、南北に長い城である。

中心の本丸は標高八八mの山頂で約 100m²の平坦地、これを落差 1m で二の丸が取り巻いている。南側の二の丸は約 700m²、末端

は約 7m の崖、下は三の丸で今は墓地である。北側の二の丸は約 350m²、その後ろ（北）に二本の空堀がある。そのうち二の丸に

近い方は、深さが約 5m・幅約 3m、これより約 15m 北の空堀は、深さ約 3m 幅約 4m である。空堀の北に広い平坦地があり、北端は

古山陽道に崖で接している。

串山城は谷を隔て、今市城の北東 250m にある。標高 134m の山頂は、約 300m²の平坦地で、その北東に頂上から約 10m の深さの空堀がある。

●【源氏大休の段】

いへんししたしらかきだしちよう

石内村国郡誌下調書出帳と言う村の事柄を浅野藩に報告した古文書に、村の名勝の高山（向山）に、固めが岳・手打が滝・大休の段、があると記されている。固めが岳は高山の八合目から中腹に連なる自然の岩組で、今も村内の各地からよく見える。その西側の谷が笹利川の源で、これに手打が滝がかかるが、その由来は分らない。神原から高山の頂上に登山道が、固めが滝の下を斜上して「入」字形に合わさる所に、今も「大休」と呼ぶ平坦地がある。これが源氏大休の段かとされている。そこは源平合戦の昔、源範頼が平家を追って西国に下向の途路、数日陣を敷き、お休みになった所だと言われている。吾妻鏡に範頼は元暦元年（一一八四）旧暦八月六日に鎌倉を立、九月十二日安芸国に入り十一月十四日周防に去ったとあるから、石内では冬の寒い幾日かを過ごしたことになる。範頼は大休の段に入るに、平家方の今市・串山城のある「かげともの道」の半坂越を避け、直接伴村の三城田あたりから奥畑に入り、栗木峠から神原に越す近道に依ったのではあるまいか。大休に入れば眼下の南城を経て尾根続きに源氏方の水晶ヶ城とも連絡がつく。大休の段は眺望よく、宮島や、遠く周防の島山を望んだであろう。また大休に滞在中には範頼神社や範頼の地名を今に残す中講の人とも交流があったのであろう。

●【有井城跡】

有井部落の東端で臼山八幡の正面の小山が有井城跡である。後ろの山の尾根を切り独立した小丘で、いま掘取部を尾首と呼ぶ。城は二段に分かれ、下段の臼山八幡側は高さ約七mの崖の上にあつて、尾首と共に城を取り巻く平地で館跡であろう。それより約一〇mの

急斜面の上が本丸であり、平坦で約一〇〇mある。なお城と臼山神社の社殿・鳥居・石段が一直線上にあることに気付く。元弘二年（一二三二）後醍醐天皇の皇子尊長親王が土佐に移された際に、有井川村（現・高知県幡多郡大形町）の有井三郎左衛門が親王を守った功により安芸国に領地を賜り、一族の者が石内に築城したと言われる。後この城は山県備前の居城となった。

●【釈迦が岳城跡】

五月が丘中学校裏の谷を登ると、山頂近くの高さ二〇数mの岸壁に大きな足跡状のくぼみが見える。里人これを釈迦の足跡と言いつえ、この谷を釈迦が谷、山を釈迦が岳と呼んでいる。この山の頂上を中心に、釈迦が岳城と言われた戦国時代の山城があつた。しかし、今はここに広島統制無線中継所ができて、昔の城の郭（構築）は殆ど残っていない。城の本丸は、今中継所のある山の最高地点で、旧三角点（四一九m）のあつた所である。又中継所の西の外郭のり高い石垣の所に、古い城の空堀（馬落とし）があつた。現在三角点は約一〇〇m北の尾根続きの地点に移され、標高四一三mの新しい標識に代わっている。釈迦が岳城跡のある山頂は己斐町と旧石内村の堺、また城跡から北西に向かう尾根が旧佐西郡と佐東郡との境界である。石内村の古文書（石内村国郡誌下調書出帖及び芸藩通誌）に依れば、戦国時代の天文一〇年（一五四一）銀山城の武田氏が毛利元就に滅ぼされた際釈迦が岳城に毛利に味方する大内義隆の家臣遠藤美作（みまふさのかみ）守が在城したとある。併し己斐村書出帖では、この城を建岩（立岩）城と呼び城主不明としている。戦国時代己斐豊後守直之の平原城のあつた己斐町の茶臼山（二〇一m）を近頃子茶臼と呼び、釈迦が岳城跡のある山を大茶臼と呼ぶ人もいる。

●【京良城跡】

※ 説明の挿絵は26頁に転載

己斐峠こいひだおの南西側にあるのが京良木山きやうらぎやまで、山頂に京良木城跡がある。この城は戦国時代の天文年間（一五三二～五四）の初頭、大内氏と武田氏が争った頃、大内氏の家臣飯田式部越中守が居た。更にその後、この城を厳島合戦に毛利元就が海上の見張りに使ったと云う。山頂の城の本丸は約一〇〇mの平坦地で、そこには、いま標高三三九・六mの三角点の標識がある。本丸の周辺から高さ約一〇mの急斜面を下ると、四～五m幅の平坦地が取り巻いている。この城跡と己斐峠の頂上を結ぶ稜線が旧己斐村と石内村の堺だが、両村で城などの呼び名が違い、己斐村ではこの城を柚ノ木城、山を柚ノ木城山と云う。

●【狐が城跡】

有井部落の後ろの山の最高地点が狐が城跡である。この城跡は下中・下沖・湯戸等から屋根形に見える。城跡は有井部落から滝の観音のそばを通って、広島市の山田に越す峠の頂上を結ぶ山の稜線の、ほぼ中程にある。この稜線が石内村と旧山田村の村堺であった。城は山頂の土を掘り崩して、独立の小山としたもので、高さ約七mの急斜面上に平坦な本丸がある。本丸の面積は約七〇m。そこには、今標高二二六・一mの三角点の標識がある。この城は戦国時代の天文年間（一五三二～五四）防長の大内氏と山本村の銀山城の武田氏が石内村で争った頃、大内すえはるかたの家臣の児玉内蔵大夫が在城した。その後、毛利元就が厳島で陶晴賢と戦った際、この城を海上警固に使ったと言われている。この城跡からは展望がよく、五日市平野はもちろん廿日市の桜尾を始めとする七尾の諸城跡、それに厳島なども良く見渡せる。

●【西が城跡】

西が城跡は半坂部落の後（北西）野山の頂にある。従って、釈迦が岳城跡とは五月が丘、半坂部落を挟んで向かい合っている。今に残る城の遺構は、山頂の土を掘り崩して作った小山状の土塁がある。この土塁は約五mの高さの急斜面の上に、約五〇mの平坦面がある。土塁のある山頂は、同じ高さの狭い稜線が続いているのが、土塁の南約三〇〇mの所で急に低くなって続いている。この山稜の末端部に今三角点があつて、標高三〇一・八mの標識がある。逆に土塁から北北西に延びる山稜は約二kmで神原の栗木峠に達する。この山稜が、旧佐東郡（安佐郡）と佐西郡（佐伯郡）との境界である。この山稜からは、旧武田氏の所領の伴・安村それに銀山城も一望できる。この城には戦国時代の天文年間、武田氏と対立した大内氏の家臣の新里式部が在城した。この人は坪井（旧観音村）の住人で坪井将監しょうげんと言い、大力で今に将監の力石と言われるものが坪井に残っている。

●【長尾城跡と古墳時代住居跡】

※ 説明の挿絵は26頁に転載

長尾城跡は上沖の新宮山の北約三〇〇mの丘で、頂上の本丸は約五〇〇mの平坦地、その東・南・西の三方は急傾斜で、南端に標高八八mの三角点の標識がある。本丸から北西と北東に伸びる尾根上の数力所の平坦地は郭跡と思われる。この城には戦国時代、武田氏の家臣長尾氏が所居したと言われている。近くこの城跡が山陽自動車道とし壊されるので事前に広島県埋蔵文化財調査センターが発掘調査、郭跡等の地下から約一七〇〇年前の弥生時代や約一五〇〇年前の古墳時代の土器を発掘した。特に尾根の北東端の笹利川にのぞむ崖上の郭跡から古墳時代の竪穴式住居跡（家の跡）が見つかった。住居は一辺約六m四方形である。この様な立派な古墳時代の住居跡は五日市では初めてである。

●【徳美城跡】

湯戸部落の後（北西）山の頂上に徳美城があった。この山頂は旧石内・八幡・河内三村の境界だが、本丸は山頂（一六〇m）の石内分にある、南北に長い平坦地で、約一五〇mあった。本丸から南東に延びる尾根が旧石内村と八幡村の堺で、更にこれから南に分岐した尾根が三和中学校裏に達し、本丸から北に向かう尾根が旧石内と河内の村堺で、三の峠に至っている。本丸の南東の湯戸部落側は急傾斜の谷で、麓に徳美山浄徳寺観音がある。

また三和中学校裏に延びる尾根の西側面も急傾斜で、この谷に面した本丸の裏には城の石組みが今も残っている。このように城は石内谷と河内谷が合流し、五日市平野を一望に眺める重要な位置にあった。この城の城主及び時代は不詳だが、城の本丸から南に延びる尾根の末端近く、三和中学の裏にある宮尾城と関係あったのではあるまいか。宮尾城は源平合戦の時、源範頼に味方し、後平家を打つため西国に下った利松孫右衛門の居城であった。

◆◆神社跡◆◆

古くから石内村内の各地にあった多くの神社は、明治四一年すべて臼山八幡神社に合わせ祭られている。そのうち臼山神社上沖の新宮神社については既に書いたので、それら以外の神社について記す。

●【黄幡社】 おおばん

半坂・堂前・渡谷宅の西隣、社殿跡や参道の敷石など、今も残っている。祭神は大己貴命であった。

●【鎌田神社】

平岩・諏訪迫、祭神は武甕追之命。たけみかづき 梶田屋の持社。

●【荒神社】 いむじん

原田・青原・社の境内の一部が、いま原田集会所になっており、石灯籠が一基残る。素戔鳴命・仲津彦命・仲津姫命を祭っていた。

●【毛利神社】

平岩・串山・串山城跡の麓で福田宅の西隣、の四方の大石が残っている。毛利某なる武人を祭ったと言う。すわ

●【諏訪神社】

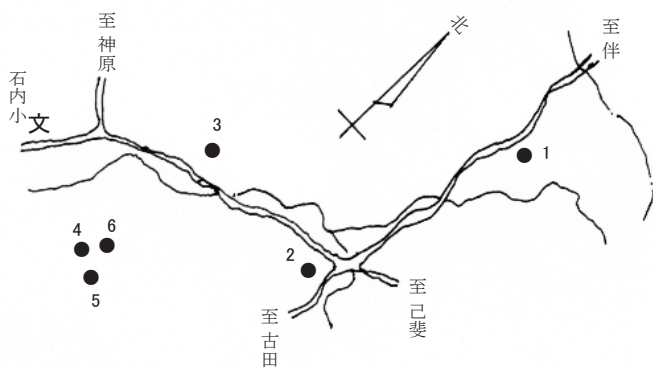
平岩・諏訪迫・平岩部落東側の山麓の谷。祭神は大日留賣命・倉頭氏くらがしらの持社。

●【加茂神社】

平岩・諏訪迫、祭神は不詳

五月ヶ丘

- 1、黄幡社
- 2、荒幡社
- 3、毛利幡社
- 4、諏訪幡社
- 5、鎌田幡社
- 6、加茂幡社



石内の神社跡（その他）

●【天皇神社】

下沖・天畑、新宅秀夫宅の裏（北）の谷の奥にあった。宇多天皇を祭った。

●【稻荷神社】

下沖・前城原、中山宅と旧山根宅との間を上沖に越す峠道と、水晶が城から迫口観音に下る道との交差点の西側にあった。食稻魂神を祭った。

●【幸神社】 さいのかみしゃ

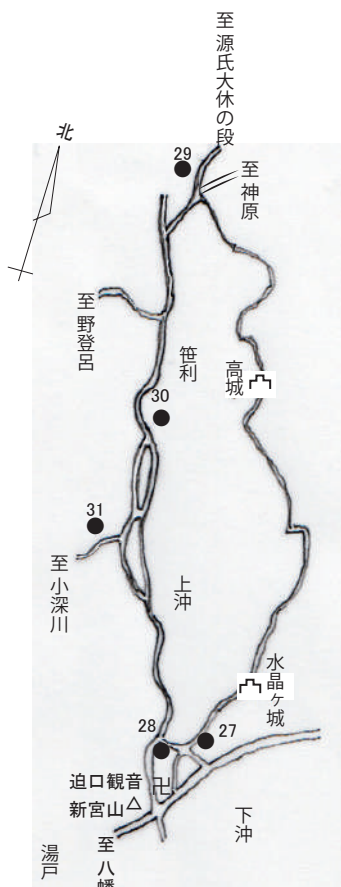
笹利・北迫、向山の山麓を笹利から神原に越す道と水晶が城から尾根続きに高城を経て向山中腹の源氏大休の段に通ずる道とが交差する点の西側にあった。ここは笹利谷と中講の深谷との分水嶺に当たる。以前は老松が三本そびえていたが、今は社殿の台石のみが残る。それは一八〇cm・横一七〇cm・高さが地上八〇cmで、石の表面には社殿の屋根の雨垂れの跡と思われるくぼみがある。沖津彦命・沖津姫命を祭った。

●【荒社】

笹利・寺川、美能素宅の前にあった。祭神は軻遇突智命で、山根持社であった。

●【河内神社】

笹利・迫田、山田宅の西二〇m、河内に越す道の側、大山祇之命



●【西の宮神社】

下沖・袖ヶ谷・新宮山上にあって、新宮神社の末社。新宮神社の祭神は、伊弉諾・伊弉冊命の第一子である。蛭子命と事代主命をまつた。

●【荒神社】

上沖・長尾、長屋城跡の南の山麓で藤本正宅の西端にあった。素戔鳴命を祭った。

●【藤本神社】

上沖・藤ヶ森、上沖から河内に越す三の峠の旧道にそい、山本宅から北西に約五〇〇mの所にあった。祭神は田心比売命であった。

●【荒神社】

湯戸・百石、平崎栄宅の西の谷。素戔鳴命を祭った。

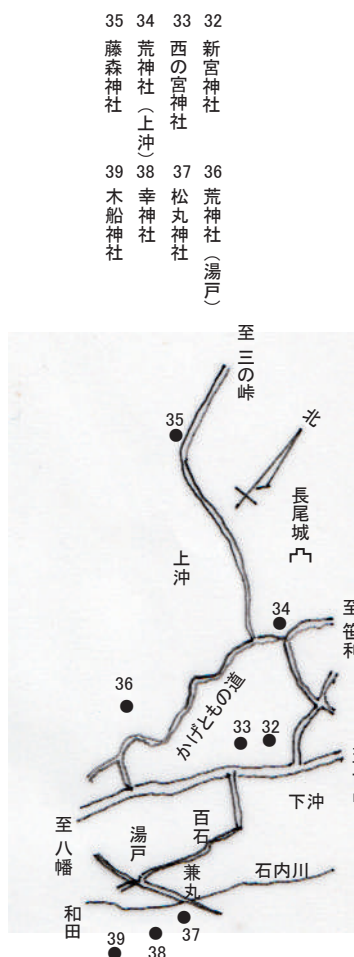
●【松丸神社】

湯戸・平原、石内川の兼丸橋の東約一〇〇mの山の麓にあった。古く湯戸地区内にあった旧保井田村の飛地の松丸・兼丸などの小字の住民の氏神であった。明治一七年これらの飛地が石内村に移された、社は、石内の村社になった。

素戔鳴命・櫛名田比売命・大穴牟遲命を祭った。

●【幸神社】

和田・穴ヶ迫、前の松丸神社の南、約三〇m、先に述べた上和田の氏神社の貴船神社の北約一〇〇mにあった。祭神は大山祇之命であった。

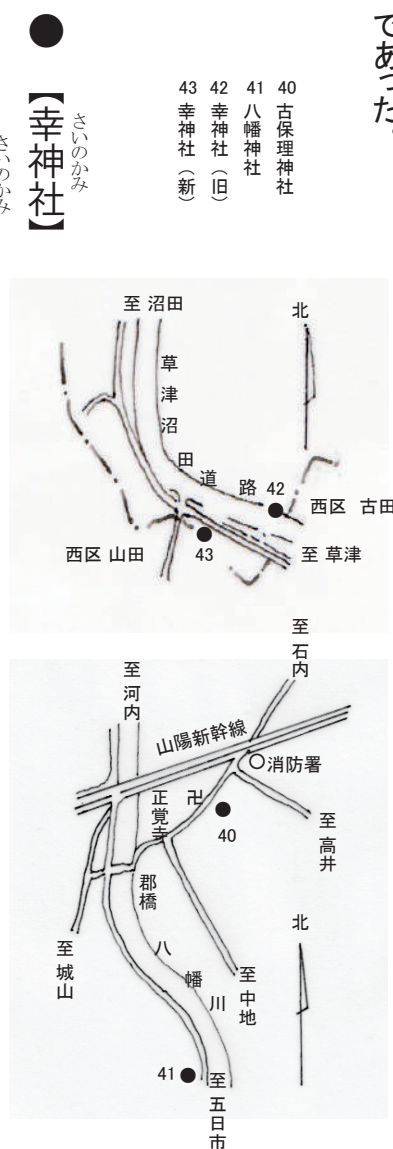


文政二年（一八一九）の石内村国郡誌調帳と言う古文書に、石内地区には、現在臼山神社に合わせ祭られている社の他に、次の二社があったことがきさされている。

●【古保理神社】

利松・郡、かつて現・八幡地区には郡橋付近を中心に多くの石内村の飛地があった。当社は、その住民の氏神社で、正覚寺の山門前に道を隔ててあった。明治一七年飛地と共に八幡村に移され、後、現在郡橋の南にある八幡神社に合わせ祭られた。

当社は八王子大明神とも呼ばれ、天照大神の御子の五男三女神を祭った。
五男神とは、あめのおしほのみこと 天之恩穗耳命・あめのほび 天之恩穗日命・たきつひめ 天津日子根命・あまつひこね 活津彦根命・くまのくすひ 熊野久須彦命・三女神は、たぎりひめ 多紀理毘売命・伊都岐島毘売命・たきつひめ 多紀都毘売命であつた。



●【幸神社】

原田・幸神社は石内と広島市古田との境界に当たる峠の頂上、旧来の県道原田草津線の北側にあった。所在は石内だが、古くから山田地区の人々で祭られている。最近旧来の県道に並行して湯来広島線が開通するため、社殿を山田地区の入り口近くに新築移転した。（昭和五七年十一月二日）。
祭り神は、道祖神の猿田彦命である。

◆◆石内の仏寺◆◆

●【浄土寺】

平岩・教場、石内のほぼ中央にある。寺号を平岩山浄土寺と言ひ、浄土真宗西本願寺派。本尊は阿弥陀如来で境内には本堂・庫裏・鐘楼・教室がある。当寺は古くは真言宗で教専坊と言つた。戦国時代の天文年間、水晶が城主麻生左衛門鎮里が、教専坊を菩提寺とし、その末子於兎丸が出家して住職となり、法名を道味と言つた。道味は天文三二年（一五五三）真宗に改宗し、京都に上り、本願寺第十證如上人に帰依し、本尊像並びに御文章を頂いて帰り、寺号を平岩山浄土寺と改めた。

●【金剛院】

原田・大師、原田の西側山の中腹にある。大日山金剛院と言ひ、高野山真言宗で、大日如来を本尊とする。お大師さんとして親しまれており、境内には本堂・庫裏・鐘楼・護摩堂がある。当院は、もと石仏山遍照庵（真言宗）と言ひ、安政四年（一八五七）に死没した大信法師の開基と言ふ。ところが明治一〇年に、厳島の中西町にあつて大日如来を本尊とした金剛院を懇請して当地に移し、大日山金剛院と唱するに到つた。そもそも、厳島にあつた金剛院は約一一三〇年の仁寿二年（八五二）即ち平安時代の初期に厳島に建てられた古い名院であつたと伝えられる。当金剛院は、現在新広島八十八ヶ所の第九番霊場となっている。

● 【浄安寺薬師堂】

上中・臼山、五日市町文化財収蔵庫（旧石内公民館）の後ろにあるお堂である。昔は大きな寺であつたのか山号も寺号もあつて万世山門前院浄安寺と言う。堂の前には古い都の奈良・京都と九州の太宰府を結ぶ古代山陽道「かげともの道」が通っており、長旅をする人の平安や地元の人々の病気の回復を祈るために建てられたものであろう。

本尊の薬師如来の座像については先に本稿の「浄安寺薬師」で少し述べたが専門家の鑑定では制作年代も古く平安後期とされ慈悲に満ちた秀作であり、信仰のうえからも美術品としての価値も高いので、昨年（昭和五十七年八月三十日）五日市町の重要文化財に指定された。古くから上中地区の人々が大切に守護されたおかげである。また宝暦五年（一七五五）に本尊の修理を行った時に書かれた木札が体内から出て、いま上中町内会で保管されている。これには薬師堂の縁起などが期されている。五日市町誌下巻三三三頁に全文が載せてあるので参照されたい。

● 【滝の観音】

下中・観音、有井池のそばから、広島市の山田に越す峠道の中程の谷間にある。本尊は観世音菩薩で、下中地区の人々で護持され、参拝道路も修理されている。本堂の横（南）には高さ約八mの滝がかかりは、周辺の密林と共に夏でも涼気を覚える。

● 【浄徳寺観音】

湯戸・井戸、寺号を徳見山浄徳寺と言い湯戸地区の西の谷間にあり。本尊は観世音菩薩である。保井田村下調帳（文政二年）によると、現在湯戸地区にある小字の井戸・兼丸などは当時、保井田村の飛地で、その住民は松丸神社を氏神とし、当観音も護持していたようである。それで当寺には、元禄年間に保井田村の庄屋高木氏が再建した棟札が残っている。明治一七年これらの飛地が石内村に移された後は湯戸地区の人々で寺は護られている。

● 【迫口観音】

下沖・迫口、坂口宅の西の丘上にある。観世音菩薩を祭る。

● 【西法寺跡】

上沖・西法寺、上沖から藤の木・河内に越す三の峠道たおに近く、山本宅の西約一〇〇mの山麓である。この跡地は近く山陽自動車道が河内に抜ける隧道の入り口になる。

● 【浄安寺観音跡】

上沖・浄安寺、上沖から笹利に通ずる道の北側で、旧岡島宅内である。廃寺になった後、本尊の観世音菩薩の石像は、いまも岡島家で護持されている。

● 【京農寺跡】

神原・京農、神原の最奥、向山の山麓に近く、丘宅の南方約二〇〇mの小丘上にある。

◆◆ 石内の古木・大樹 ◆◆

● 【神原のシダレザクラ】

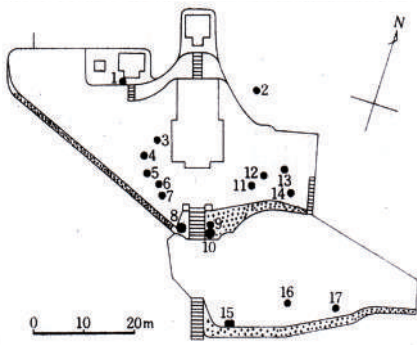
向山の麓、岡宅にある古木で、昭和四八年広島県の天然記念物に指定されている。幹の周りは胸の高さで二・五m、樹高は約一〇m、幹は三本の枝を分かち、垂れ下がった小枝に満開の桜花が春風に揺れて美しい。岡家の祖先が平岩の秋信家から神原に分家した際、この桜を植え、元禄四年（一六九一）に死去されたので（過去帳）、樹齢は三〇〇年以上となる。本樹が県指定となったのは、シダレザクラの古木は東京以北にはかなりあるが、本樹の如く南方で然かも沿岸部近くで長寿を保ち、大樹となっているのは珍しいからである。

● 【湯戸のモチヅギザクラ】（ソメイヨシノ）

浄徳寺観音の境内にある大樹。幹囲は胸高二・九m、樹高約二二m、三本の太枝を分かつ。本樹の高さはヨシノザクラでは県内四位以内とされている。（広島県巨樹調査、昭和五七年）。

● 【中講のコオヤマキ】

中講の六拾部忠紀宅にある。幹囲は胸高三・三、樹高は約三三・三、樹高では広島県では第一とされている。（広島県巨樹調査）。コウヤマキはスギ科の植物で和歌山県の高野山に古くから知られ、その名がある。自生地は珍しく、佐伯郡下では湯来町の不明・恵下^{えげ}両国有林と石ヶ谷峡、佐伯町の羅漢温泉の北の黒打峡などに見られる。本樹は約一〇〇年前（不明）より幼樹を移植したものと言われる。



※ 計測の基準……地上1.2m
立会人
小田昭三、小田イツ子、田中孝雄、道添富造
奥田耕司、谷口武義 西本忠良（以上7名）

境内配置図と古木の分布

記号	植 物 名	幹 周(根回り)	樹 高	平成23年5月18日(水) 幹周 実測結果	樹木の特徴	備 考
1	モミ 1号	2.85m	約38m			
2	モミ 2号	3.12m	約32m			
3	サ カ キ	1.30m	約10m			枯死(保存)
4	スギ 1号	2.50m	約30m			
5	イヌマキ1号	1.40m	約22m			
6	イヌマキ2号	2.50m	約30m	2.64m		
7	スギ 2号	2.20m	約30m			
8	スギ 3号	4.85m	約38m	5.25m		
9	スギ 4号	2.55m	約38m	2.73m		
10	アカクロマツ	3.80m	約45m			
11	ケヤキ	2.20m	約20m	2.79m		
12	クロキ	1.20m	約0m			
13	ク ス	2.10m	約30m	2.19m		
14	アラカシ	2.60m	約25m			伐採、撤去
15	タブ	2.70m	約15m			
16	スギ 5号	2.20m	約31m			
17	ムクロジ	1.95m	約16m			
18	ボダイジュ	0.66m	約15m			追加記載

● 【白山八幡神社の社叢】

石内の白山八幡神社の社叢には大樹が多い。それらのうち徳に顕著なものを示したのが左表と図である。これらの多くは巨木としては広島県巨樹調査（昭和五七年七月）にのせられている。それによると、表中の番号①のモミが幹囲の太さから、モミでは県内第三〇位で、⑤のイヌマキ二号が県下六位、⑨のケヤキが一五位、⑫のイヌグスは七位、⑭のムクロジは数少なく比較的珍しい植物だが、県下八位となっていて、白山八幡の森は県内では巨樹の多い社叢として注目されている。これらは先祖の人々が大切に守り育てて残して下さった貴重な文化財であるから、我々も、これからを保護し、長く子孫に伝えたいものである。

◆◆ 石内小学校の沿革 ◆◆

● 【石内小学校①】

明治五年（一八七二）八月の学制頒布で、石内村では明治七年に四つの学校が設置された。その内二校は現在の石内地区内の協成館と知止館で、前者は平岩の小字教場きやうじやうばう四六二七で、現在の浄土寺山門の東側にあり、後者は下沖で正確な場所の記録がない。協成館については、半坂の白口文夫宅に伯父の逸徳氏の卒業証書（明治八年）が残っている（左図）。

同じく明治七年設置の他の二校は

寿教館と広業館で、共に当時八幡

地区利松・中地などにあった石内村

の飛地（五日市町誌中巻一二頁参照）

に設けたのである。寿教館は正覚寺

内にあった（石内小学校沿革誌）

が、広業館は教場学校、知止館は

丸山学校。寿教館は古保理学校。

広業館は石飛学校となった。丸山学

校は下沖の小字丸山九四五で、現在

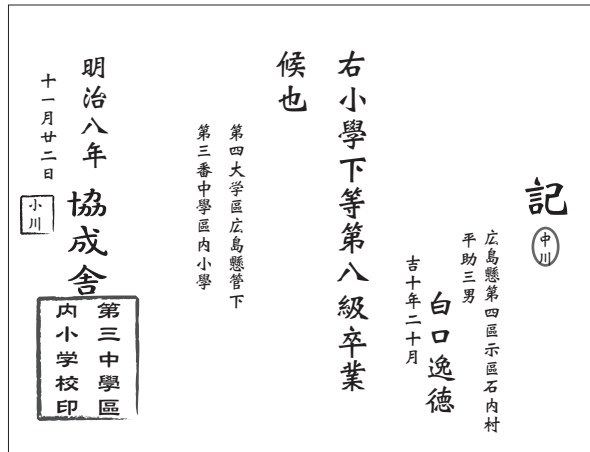
の寺尾モータースの所である。

古保理学校は、利松の佐伯消防署

八幡支署の南東約一〇〇m、現在の山根宅の所にあったと言う。石飛と呼

ぶ石内村の飛郷が中地に二カ所あり、鈴峯山麓の田中寺の旧所在地と、

その西の石内川西岸で、石飛小学校の所在は何れか不明である。



● 【石内小学校②】

明治一一年五月、平岩の教場小学校と下沖の丸山小学校は新築されたが、八幡地区内の飛郷の二校は廃止された。それはこの年、郡区町村編制法が施行され、江戸時代以来の各村内に散在していた飛郷の整理が進み、石内村でも八幡地区内の飛地が八幡村に編入され、子弟は野畑村の小学校に移されたのである。

明治一五年ごろ日本の経済界が不況になり、学校整備に行きづまる町村が多いので、一八年の教育令改正で一部の小学校を分教場として学校経費の節約を図った。石内村では丸山小学校を教場小学校丸山分教場とした。

明治二〇年四月から小学校令改正で、教場小学校を石内簡易小学校と改称した。明治二二年二月一七日には校舎を現在の上中の小字曲崎に新築移転し、それに丸山分教場をも統合した。

翌々年の明治二四年八月一日から三年修業の石内尋常小学校と改称し、更に明治二九年四月一日高等科を併置した。この時校舎は従来の建物に二階を増築した。

明治四一年四月一日から尋常小学校は六年の義務教育となり、それに二年の高等科が置かれた。

この尋常高等小学校の形は、その後長く続いたが、昭和一六年四月一日から石内村立石内小学校となった。その後昭和三〇年四月一日から新五日市町の誕生に伴い、五日市町立石内小学校に改称。

更に昭和五二年三月二〇日には、広島市合併に伴い、広島市立石内小学校となり現在にすたっている。

◆◆ 水晶が城跡 ◆◆

石内は古くは石道と呼ばれ、古代山陽道の交通の要地に当たっていた。水晶が城は、この石道のほぼ中央にあつて古道に、臨み源平時代から戦国時代の末期にわたる数百年の間、重要視された山城であつた。後世この城のふもとから水晶がとれたので水晶が城とよばれているが、歴史上には「石道本城」として知られている。

水晶が城が最初にできたのは、今から七九六年前の一八四年頃で、源平合戦に源範頼が平氏と戦いながら陸路九州に向かった際、範頼の家臣が居城したといい、また源氏方の佐々木左衛門国正がいたともいう。この水晶が城の源氏は、いま平岩部落に残る串山・今市両城の平氏と戦つたと伝えられる。

室町時代（一三三三）初め頃から戦国代時代にかけて佐西郡（現佐伯郡）は厳島神社の神領で、神主家が治めていた。その頃石内は豊富な良質米の産地として戦国武将の垂涎の地であつた。当時安芸国の守護で佐東郡（旧安佐郡）の地領であつた、山本村の銀山城主武田氏の領地は、石内で厳島神領と接していた。そのため神領地の争奪をめぐって武田氏と神主家それに当時佐西郡に勢力を伸ばしていた防長の大内氏との間で争いが絶えなかつた。

この争いのため、石内の各所には山城が築かれたが、水晶が城は石道本城として常に、それらの中心となり、水晶が城を征する者が石内はもちろん五日市平野をも征した。

承久三年（一二二一）甲斐の武田氏は、承久の乱の戦功により鎌倉幕府から安芸国の守護職を賜り、一族が三〇〇余年山本村の銀山城によつた。厳島神領争いは武田信在が応永四年（一三九七）半坂を越え石道・利松・坪井村に侵入したことに始まる。しかし、この

時は足利幕府の命で返還した。

承久一二年（一四四〇）武田信賢は郡での戦功で厳島神領の佐西郡（佐伯郡）を賜つた。神主家は之に抵抗し防長の大内教弘の援助を得て廿日市の桜尾城で再三信賢と戦い、ついに武田軍を銀山城に退いた。しかし、享徳三年（一四五二）武田は石道・年松・坪井村を武力で領有した。これらの戦いで石道村は度々戦乱場になつた。

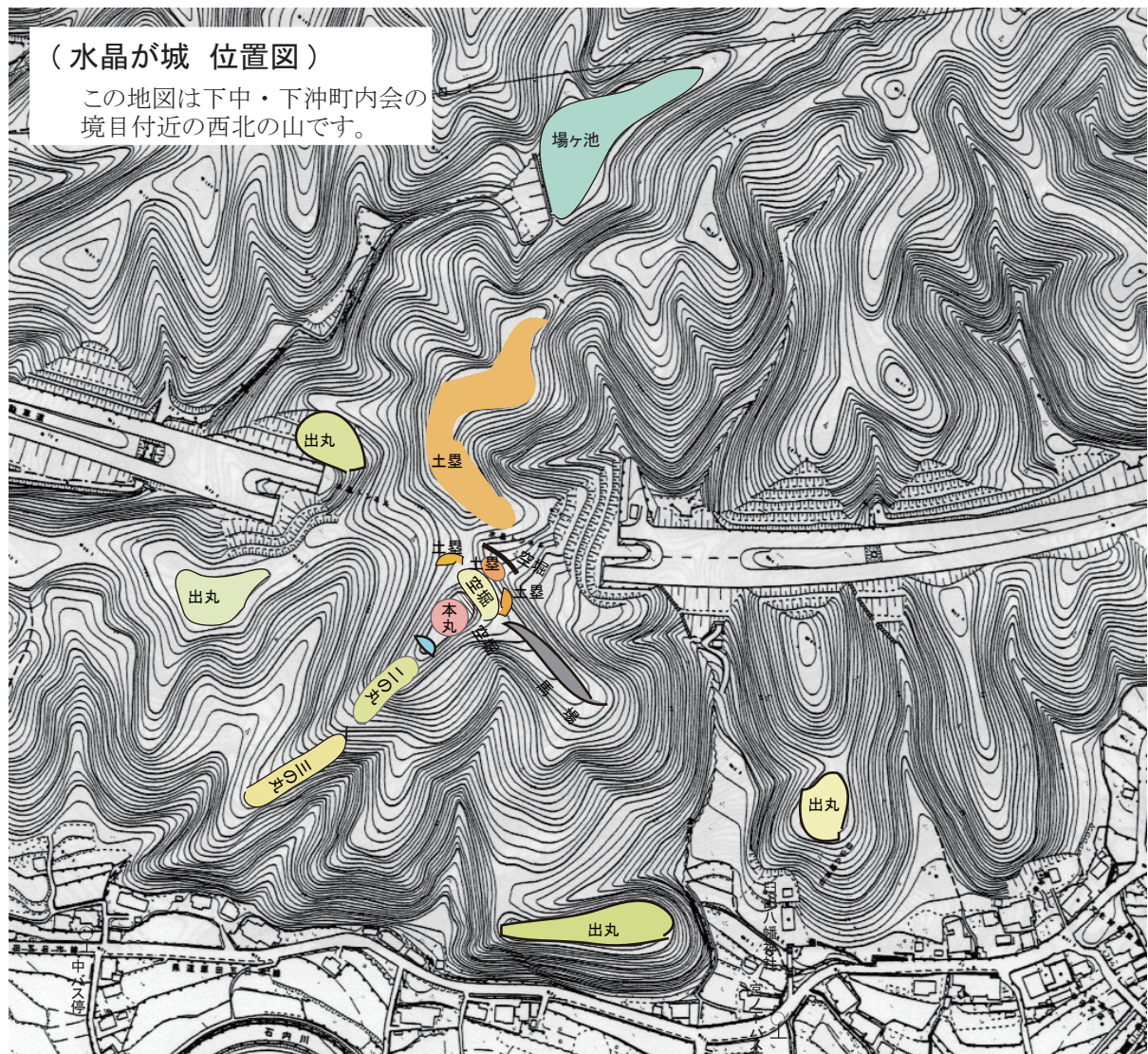
いったん、武田氏に帰した石道村などの神領も、その後石道の城が大内氏の援助で落ち、再び神主家に還つた。ところが永生四年（一五〇七）神主藤原興親の死で、興親の縁者の友田上野介と小方賀守との間に神主職の後継争いが起つた。大内義興は、この仲裁をせず、かえつて自分が神領を横領しその統治のため部下の杉甲斐守を石道本城、内藤孫六を己斐城、島内越中守を廿日市の桜尾城の藩主とした。この大内氏の処置に不満な厳島神社の神領衆の反感に乘じ、先の友田上野介は、今度は銀山城の武田光和の協力を得て石道本城その他の二城を落とし、神主職になつた。この戦いで石道本城の杉甲斐守は廿日市に逃れ討たれた。今から四四〇年前の天文一〇年（一五四一）当時まだ大内氏の配下であつた毛利元就が銀山城の武田氏を滅ぼしたため、大内氏の勢力が厳島神領に盛り帰し、大内氏は神主友田興藤を滅ぼし、桜尾城・石道本城（水晶が城）等に城番を置いて神領を統治した。水晶が城には麻生右衛門鎮里がいた。天文二〇年大内義隆が家臣の陶晴賢に滅ぼされたので、毛利元就は晴賢と闘うため軍をおこし、天文二三年九月半坂を越え水晶が城に入り、臼山神社に戦勝を祈願し、石道河内・倉重村の陶軍を追い、宮内村の折敷畑山（おしきのばた）のうが高原の西で陶軍の将宮川甲斐守を滅ぼし、一年後厳島合戦の前哨戦に勝つた。

水晶が城は毛利氏の中国支配以後は、戦略的価値を失ったが、約八〇〇年前の源平時代から戦国末期に至る約四〇〇年の間に作られた遺構は今もかなりよく保存され、日本の中世山城の姿をとどめる貴重な存在とされている。

城は石内のほぼ中央にあつて、その中心の本丸は臼山神社の西方三三〇mの、標高二二四・八mの山頂の台地である。今は松が生え、その円形の姿は上は半坂、下は遠く八幡からも見える。その他、二の丸、三の丸それに数か所の出丸、数多くの土塁も残っている。出丸は本丸から各方面に伸びる山稜にあつて、東端は臼山神社裏の臼山西端は本丸の西一五〇mにあつて、城の東西の距離は五〇〇mに及ぶ。

今に残っている水晶が城の遺構については、色々な専門家の最近の調査から、次のことがわかってきた。

水晶が城の登り口は今でも沢山あるが、県道に沿うバス停「中」の所から中山宅の横の谷を登るのが正面道だったらしく、これを昇り詰めると今も広場があり、ここに城門があつたらしい。ここには下沖の迫口観音の所から尾根伝いに登る道、下講・中講から来る道上沖の久保田宅の裏の谷から急坂を登る道等すべて集まっている。この広場から右（東）へ一〇〇mの所に「本丸」跡が見える。またここから本丸の後側（北）に向かってゆるい坂道を約一〇〇m登ると広場に出る、ここは「二の丸」で館跡とされている。



やかたあと

館跡とされている「二の丸」前方(南)には「本丸」がそびえている。ただその間には三つの「空堀」がある。空堀は「馬落」とも言って深い溝で、敵の攻撃を防げるのに役立ったのであろう。この三つの空堀は、現在二の丸に近いものが幅3m、深さ2m、その次は最大で幅7m、深さ2・5m最後が幅3m、深さ2・5mである。最期の空堀から本丸の上までは約9mの急斜面で、武者が重い鎧兜よろいかぶとを着て攻め登るのは大変困難であらう。本丸は円形で平たく約300mあり、「こ」は、いま標高123・4mの三角点の標識がある。本丸からは水晶が城を取り巻く石内の諸城、それに遠く宮島・廿日市まで見渡せる。

本丸の前面(南)の約8mの高さの急斜面を降りると「二の丸」がある。この「二の丸」は南北の長さが約四五m、東西の幅が約一二mの長方形で面積は五五〇㎡あまりある。数個の「段」から成っていて、下端は急な崖で終わっている。「段」とは段々畑のように山の急斜面わけずり、それを幾つかに区切って、平坦にしたもので、水晶が城にはこの他沢山ある。

この「二の丸」から約二〇mの急斜面を下った南西側の尾根が「三の丸」で、これは上の「二の丸」よりも広く、多くの段からなっている。その南端は中山宅の上の約六〇mにまで達し、西側は前述の水晶が城の正面口と考えられている谷に向かつて急傾斜している。

前に述べた館跡やかたあととされている「二の丸」は、後ろ(北)と東側が土塁で囲われている。この土塁は三分されているが、その東側のものは特に高くなっている、物見櫓跡やぐらと考えられている。

これらの土塁の後ろ(北)には、深さ3m、幅3mの空堀がめぐらされ、その後方(北)は更に大きな土塁で囲まれている。この土塁の北及び西側は下講・中講に通ずる道にのぞみ、その方面の防衛に役立ったのであろう。

やぐら

物見櫓跡とされている土塁から東に延びる尾根が約一〇〇mに渡り幅四mくらい溝状に掘り下げられ、両側は土塁状に盛土されている。これは昔から馬場跡とされ、末端は臼山神社の西の谷に向かつて断崖だんがいでおわっている。

水晶が城では本丸をとり巻く岡や尾根に出丸がある。西側では迫口観音から登る道と下中バス停から正面道との合致点、また、上沖から城の北側の谷を昇った丘に大きな出丸がある。東側では下中の槇尾宅の裏山、八幡神社裏の臼山が出丸で、臼山は石臼状に上下二段になっている。これらの出丸は何れも数個の段からなっている。

水晶が城から北東に向かつて下講に通ずる平坦な道は、城に水を引きいた水路跡とされている。道幅は一・五km。緩やかに尾根や山腹をめぐって下講の小口宅の裏の道々谷みちづちやにまで達している。この谷の水量は地名の響きが示すように今でも豊富である。この水路跡の道は歴史を忍ぶ良いハイキング道である。

◆◆ 辰野誠次先生の水晶が城跡への思い ◆◆ — 感想 —

辰野誠次先生が生前、石内の文化遺産の一つの水晶が城跡に込める期待とこの城の規模と歴史上の経過と関わった人物への意気込みは、ふる里の歴史愛好家の一人としてロマンを追いつけておられたことは、会員の田中孝雄さんが調査を伴にしたひとだ。、病床の先生が「何か新たな発掘品があったか？」と聞かれたと言う伝承の言葉にも伺える。この末尾の歴史を偲ぶハイキング道である。と結ばれた文章で「歴史の散歩道」など広域な公園整備に推挙するかの思いが込められているのが容易に分かる。山陽高速道の堀切をトンネル工事に變更を提案しこの史跡を護ったのもその現れと思われる。(窪田)

◆◆石内公民館だより◆◆の中より

「石内公民館だより」第2号

昭和三十九年七月発刊

(編集・印刷)

●郷土史 石内の沿革 —石田秋三—

石内は細長い山村とされている方が多いが、実は、三方山に包まれ、僅かに南に開け、三角形を丸くしたような山村である。

西南太平記によると、昔は石道村と称していたが、山に石が多く、道に石がたくさん連なっていたので、寛文年間(今から三百年前)に石内村と改称したと云われている。また昔は、石内は入り江で湯戸辺りまでは海水が入りし、川幅も広く渡りの飛び石が、百ばかりあったので今でも百石と言う所があり、時々怪我人も出たので供養のため建立した石仏が石塚として残っている。

旧藩時代は、浅野越前殿の知行所で(総畝数一九四町歩石高二三三九石)明治五年、大小区が定められ当時は、半坂・原田・神原・鍛冶計(梶毛)・平岩・中屋(上中)馬場(下中)・笹里(笹利)・沖組・湯戸とその他石内の飛地が八幡村にあり、八幡保井田の飛地

が、石内にあったので 明治二十二年保井田の飛地と和田を合わせ、八幡にあった飛び地をを分割して現在の石内村ができたのである。

昔から石内は米麦作の生産を主とする純農村でその質は特に優れていたようである。それから約百四十年前の調査で戸数四六五戸(内農業三二五戸日稼一三〇戸・医師二戸・職人八戸)となっており、人口・戸数共に現在より遙かに多いようである。

昭和三十年四月石内・河内・八幡・観音・五日市の五か町村が合併し現在の五日市町大字石内となったのであるが、最近は産業構造の急速な発展やそれに伴う生活様式の変動により、また広島市という大消費都市に近接している関係上純農村であった石内も近郊農村となり兼業農家が増え 第二次・第三次産業に 通勤従事する者が著しく多くなってきた。さらに交通の発達特にバス路線の開発は、石内の文化と生活を一変しようとしている。

「石内公民館だより」第168号

昭和五四年一月発刊

(公民館運営審議会議長)

●所感 —辰野誠次—

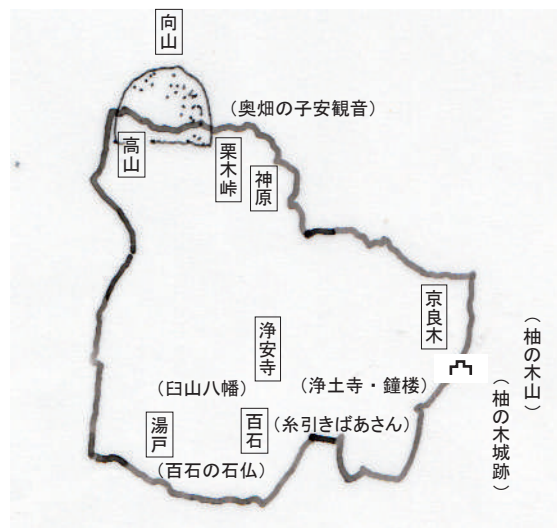
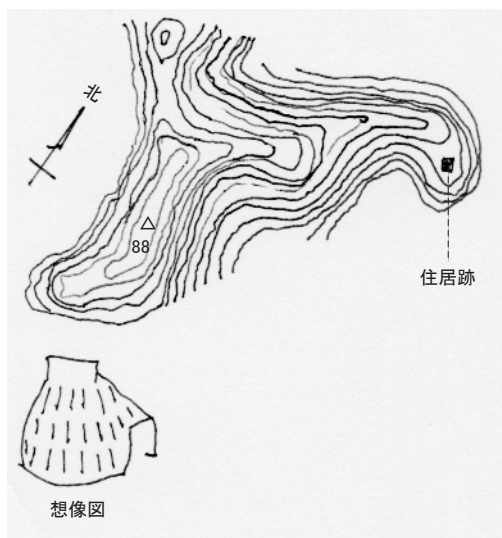
昨年は長い間の念願であった新・公民館が落成し、今後この地域の近代的な公民館活動がいつそう進展することを喜んでいきます。既に各種学級グループ活動が盛んに行われその学習成果が、先の文化祭で今までになく長日にわたり公民館を会場として展示され得たことは同慶の至りです。

戦後重視された社会教育は全国に沢山の公民館 設置を促しました。そしてその学習テーマは、何々の「民主化」に始まり、農村の近代化と言ったような「近代化」「人間関係」その「断絶」「情報化社会」最近では生涯教育「ふるさと」「コミニティ」等時代に即し提示されました。中には、まだ不消化のものもあつて、何れも今後も続けてよい重要な学習課題と思われます。

この様な公民館の学習テーマをこなし、真の公民館活動を盛んにするには、よく云われている「つどろ」「まなぶ」「むすぶ」の公民館の三つの機能が充分に発揮される事と思います。学習のために公民館にしばしば気軽に「つどろ」と、「まなぶ」は勿論公民館の眼目で、地区民の各自が青年学級、婦人学級、成人学級、高齢者学級または何かのグループ教室の一つに関係されたいと思います。

更に公民館には地域の福祉関係等の 団体や機関の間の連絡調整の「むすぶ」と云うことが役目とされています。

今後地区の皆様の協力による新公民館の発展を祈ります。



【長尾城跡と古墳時代住居跡】

石内村と己斐村は昔は佐伯郡（佐西郡）であった
石内と己斐では京良木城・柚の木城と呼称が違っていました。

【京良木城跡】

（芸藩通誌 己斐村図）

【編集後記】

自分の住んでいる町の歴史が知りたい…。石内で生まれ育った人でも知らないことが多いものです。40、50年前には整理された資料が乏しく、村の古老達によってのみ語り伝えられてきました。現在石内地区には、幾つかの団地ができて、地区外からの転入者で世帯数も増えています。そんな新しい住民の方も、自分の住む町は果たしてどんな歴史を持っているのか知りたいのではないのでしょうか。近年合併を機に五日市町誌が発刊されたことで以前に比べ資料が入手し易くなり、学校・公民館活動などで自然と歴史文化をまもる活動が活発になって参りました。しかし資料については、その多くが古文書を主体とした歴史の文献や資料が中心であり、気楽に目で見ても概要を知るためのものはまだまだ数が少ないのが現状です。

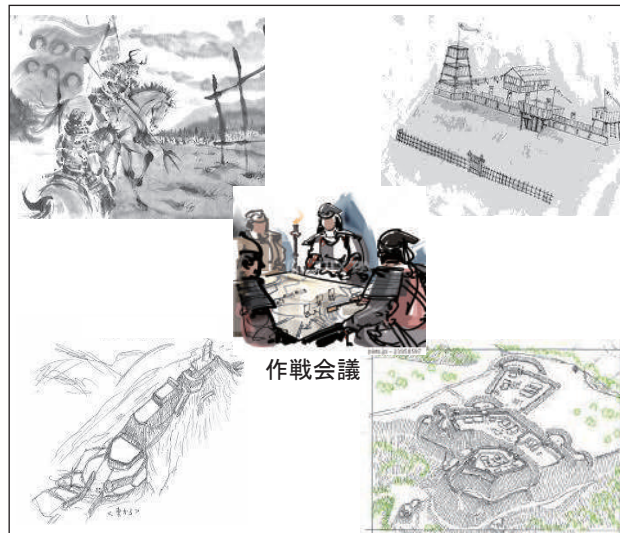
そんな折、故 辰野誠次先生のご子息より、氏が生前郷土石内を愛し活動された貴重な資料を会に寄贈していただきました。資料の整理をしながら内容に目を通すうちに、その資料の素晴らしさに感銘を受けました。先生は植物学の最高権威として多忙な身でありながら、郷土史研究の活動と指導に長年携わってこられた方です。特に五日市町誌発刊に際しては、原稿作成委員に名を連ねて献身的な資料収集と原稿作りを行われ、県内の会合にも積極的に参加されています。この資料の中にはそんな内外の交流の中で入手された貴重な資料も含まれており、改めてその功績に感謝するばかりです。

私の小学生時代、夏休みに草花採集と標本作りの指導を受けた中で学習の面白さを教えていただいたときの姿や、広島大学の教授を退官された直後、石内川の堤防の小道で和服姿に下駄履きで背筋をピンと伸ばし格好良く歩きながら目の前の松丸神社・貴船神社・百石・徳見城を熱く話される姿が思い出され、その機会に恵まれた事を感謝すると同時に、先生の語り継ぐ熱意をあらためて実感しました。その熱意は、郷土の文化財・史跡を、ご自分で歩き調べ、古老から情報を聴取、当時発刊の「公民館だより」に連載、更に石内公民館のサークル活動の指導など後継者づくりに励まれた功績も資料の中身から読み取れます。今回の資料作成を通じ、湯戸の辰野先生・仲田繁そして石田秋三の3氏が残された資料を新たな形にできた今、安堵の気持ちで一杯です。

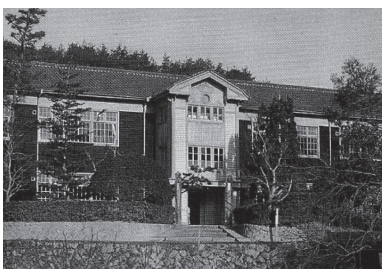
最後に、この貴重な資料を当初は公文書館に寄贈を検討しましたが、本年「石内公民館まつり」に合わせて奥田泰将石内公民館長のご理解を得て石内公民館で保管監理をお願いすることになりました。今後、石内の地区住民、子供たち、石内に転入して仲間となられた方々、そして石内に興味を持たれた人達にとってこの資料が何らかの一助になれば幸いです。

平成 29 年 3 月 31 日

石内をもっと知ろう会 会員 窪田君男



戦国時代の山城
(想像図)



鉄筋コンクリート造校舎になる迄の2階建て
木造校舎。(時計台もあります)



石内小学校・校章



五日市町に合併するまでの石内村役場漆喰塗りの
屋根には時報を知らせるサイレンが設置されている。